

焦りが募り辛く苦しい日々

そうは言っても、何か特効薬があるわけではありません。その日暮らしの如く、毎日の授業を何とかするために、ワークシートを作成し、それを使って授業を進めていきました。

生徒はというと、こちらが指示したことはやってくれます。とはいえ、受け身で主体性がなく、楽しそうではない顔を毎時間見るのは、かなり辛いことでした。ワークシートに頼る授業では、こうになってしまうのは当然の帰結でした。「これは何とかしなければいけない」焦る気持ちをあざ笑うかのように、月日だけが過ぎていきました。

そんなある日のことです。辛い日々が続き、途方に暮れていた私ですが、何とかしたいという気持ちだけは失うことなく、時間を見つけては、すがるように書籍や資料を読んでいた。すると、ついにそのときがやってきました。

次々と救世主が現れる

何かの教育雑誌で「ディベート」というものに出会いました。それまでも名前ぐらいは聞いたことがありました。読んでみて、すぐに「これだ」と思いました。早速、ディベートに関する書籍を購入することにしました。すると、教室ディベートや授業ディベートというワードが入った書籍が複数世に出ていることがわかったのです。ディベートを授業に取り入れる際の羅針盤を手に入れた思いでした。

最初に「これだ」と思えたのはディベートですが、その後も同じようなことがありました。群読、ジグソー学習、ワークショップ、バザール方式、一枚ポートフォリオなどです。改めて振り返ってみると、どんな国語の授業をしたかったのか、どんな生徒を育てようとしてきたのかがわかってきました。

表現できる日本人を育成したい

最初から、計画的にそうしてきたわけではありません。そのとき、そのときで、国語の授業のことで悩み、考え、実践してきたことに、共通点というべきか柱のようなものがあったことに、自分で気づいたということです。

それは、タイトルを付けるとしたら、「表現者を育てる国語の授業」とでもなるでしょうか。自分の考えや思い、自分で読み取ったことを、書いたり話したりできる生徒を国語の授業を通して育てようとしてきたのだと思います。そこには、大げさに言うと、「次代の日本人を育成する国語の授業」という思いも込められています。きっと、海外の日本人学校での経験が影響しているのでしょう。

(次号に続く)